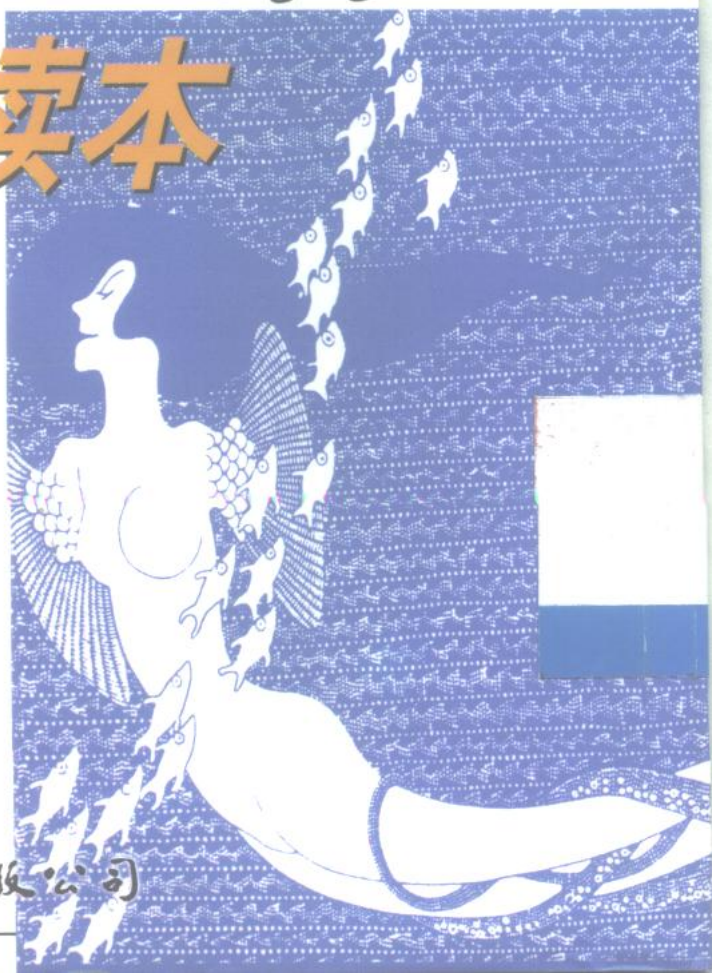


日语世界童话名作选

2

日语

突破读本



世界图书出版公司

日语突破读本②

——
日语世界童话名作选



世界图书出版公司

广州·上海·西安·北京

11K86/33

日语突破读本②

——日语世界童话名作选

广东世界图书出版公司出版

广东肇庆新华印刷有限公司印刷

广东世界图书出版公司发行

广州市新港西路大江冲 25 号

邮政编码：510300

1999 年 1 月第 1 版 开本：880×1230 大 32

1999 年 1 月第 1 次印刷 印张：12

印数：0001—5000 册 字数：240 千

ISBN 7-5062-3713-X/H·0101

版权贸易合同登记号：19-1998-005

出版社注册号：粤 014

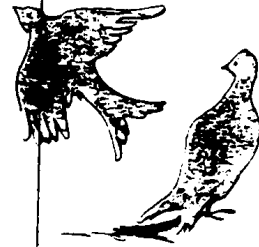
定价：18.00 元

本书由日本世界文化社授权广东世界图书出版公
司在中国大陆内出版、发行，版权所有，翻印必究

目 录

あお とり
青い鳥

■原作 梅特林克(一八六二—一九四九)比利时
■文 矢部美智代(作家)



◎クリスマス・イヴ

◎思い出の國

◎夜の國

◎森の中

◎墓地

◎幸福の國のぜいたく

◎よろこび

◎みらいの國

75 62 47 44 34 24 16 4

◎クリスマス

ピーター・パン

■原作 巴里(一八六〇—一九三七)英国
■文 森下美根子(翻译家)

◎ピーター登場

◎とび去った子どもたち

◎空の旅

◎ネバーランド

◎小さな家

◎地下のかくれ家

◎人魚の入りえ

◎さらわれた子どもたち

◎妖精を信じよう

◎海ぞく船

◎さいごの対決

◎なつかしいわが家へ

169 159 154 149 140 133 130 124 119 112 102 94

くるみわり人形 にんぎょう

■原作 霍夫曼（一七七六—一八二二）德国
■文 矢崎节夫（作家）

- ◎ クリスマス・イヴ 178
- ◎ すてきなプレゼント 182
- ◎ マリーのお氣に入り 188
- ◎ 七つの頭の大ねずみ なな あたま おお 194
- ◎ 負けるな、とつげき ま 204
- ◎ ベッドで目がさめて 208
- ◎ かたいくるみのお話 はなし 213
- ◎ お話のつづき はなし 222
- ◎ お話の終わりは、いかに はなし 227
- ◎ さいごのたたかい 237
- ◎ ようこそ人形の國へ にんぎょう くに 247
- ◎ なつかしのお城 しろ 253
- ◎ マリーはおきまりのまま 258

夏の夜の夢 なつ よ ゆめ

■原作 莎士比亞（一五六四—一六一六）英国
■文 木村由利子（翻译家）

賢者のおくりもの けんじや

■原作 欧・亨利（一八六二—一九〇九）美国
■文 谷口由美子（翻译家）

クリスマスキャロル

■原作 狄更斯（一八一二—一八七〇）英国
■文 长兴孝子（剧作家）

- ◎ マーレイのぼうれい 314
- ◎ さいしよの精霊 せいれい 331
- ◎ 二番めの精霊 ばん せいれい 347
- ◎ さいごの精霊 せいれい 361
- ◎ 終わりに お 371

H369.4

02

V2



00012708



——
日语世界童话名作选

日语突破读本②



C0489004



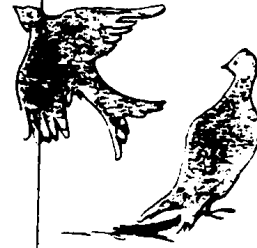
世界图书出版公司

广州·上海·西安·北京

目 录

青い鳥

■原作 梅特林克(一八六二—一九四九)比利时
■文 矢部美智代(作家)



- ◎ クリスマス・イヴ 4
- ◎ 思い出の國 16
- ◎ 夜の國 24
- ◎ 森の中 34
- ◎ 墓地 44
- ◎ 幸福の國のぜいたく 47
- ◎ よろこび 62
- ◎ みらいの國 75

◎ クリスマス

ピーター・パン

■原作 巴里(一八六〇—一九三七)英国
■文 森下美根子(翻译家)

- ◎ ピーター登場 94
- ◎ とび去った子どもたち 102
- ◎ 空の旅 112
- ◎ ネバーランド 119
- ◎ 小さな家 124
- ◎ 地下のかくれ家 130
- ◎ 人魚の入りえ 133
- ◎ さらわれた子どもたち 140
- ◎ 妖精を信じよう 149
- ◎ 海ぞく船 154
- ◎ さいごの対決 159
- ◎ なつかしいわが家へ 169

くるみわり人形 にんぎょう

■原作 霍夫曼(一七七六—一八二二) 德国
 ■文 矢崎节夫(作家)

- ◎クリスマス・イヴ
- ◎すてきなプレゼント
- ◎マリーのお氣きに入り
- ◎七つななの頭あたまの大ねずみ
- ◎負まけるな、とつげき
- ◎ベッドで目めがさめて
- ◎かたいくるみのお話はなし
- ◎お話はなしのつづき
- ◎お話はなしの終わりは、いかに
- ◎さいごのたたかい
- ◎ようこそ人形にんぎょうの國くにへ
- ◎なつかしのお城しろ
- ◎マリーはおきあきあき

258 253 247 237 227 222 213 208 204 194 188 182 178

夏の夜の夢 なつ よ ゆめ

■原作 莎士比亞(一五六四—一六一六) 英国
 ■文 木村由利子(翻译家)

賢者けんじやのおくりもの

■原作 欧・亨利(一八六二—一九〇九) 美国
 ■文 谷口由美子(翻译家)

クリスマスキャロル

■原作 狄更斯(一八一二—一八七〇) 英国
 ■文 长兴孝子(剧作家)

- ◎マレーイのぼうれい
- ◎さいしよの精霊せいれい
- ◎二番ばんめの精霊せいれい
- ◎さいごの精霊せいれい
- ◎終わりおに

371 361 347 331 314

298

266

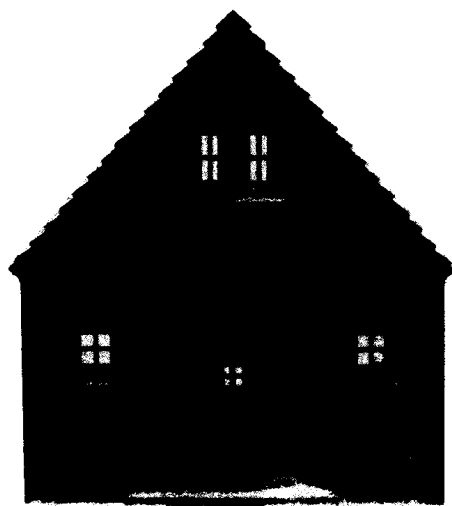
青い鳥 あおとり

クリスマス・イヴ

きょうは、クリスマス・イヴです。
もみの木に星や、きらきら光るか
ざりをつけて、きれいなクリスマス
・ツリーを作る日。おいしいごち
そうや、おかしを家族みんなで食
べ、おいわいをする日。そして、子
どもたちが、一番楽しみなのは、サン
タクロースのおじいさんが、真夜中
になると、プレゼントを持って来て
くれること。

でも……。

チルチルと妹のミチルには、ツリーも
ごちそうもおかしも、そして
プレゼントも、



原作 げんさく メーテルリンク

何なにもありませんでした。

チルチルのとうさんは、木きこりです。いっしょうけんめいはたらいでも、毎日まいにち、とてもまずい生活せいかつなのです。だから、なんにもなくなつてしかたない……チルチルには、よく分わかつていました。

そして、とうさんやかあさんが、口くちでは言いわなくても、心こころの中で「ごめんね、チルチル、ミチル」と、そう思おもっていることまで、チルチルには分わかつているのです。だから、チルチルは、昼間ひるまは、かあさんを悲かなしませないように、せいっぱい、楽しく元氣げんきにしていました。

でも、夜よるになると……。やつぱり、なんだか落おち着つきません。つまりません。

とうさんとかあさんがねてしまうと、チルチルはベッドの上うへに起き上あがりました。となりのベッドのミチルも、まだねむれないらしく、もぞもぞしています。しばらくすると、ミチルがそつと小ちひさい声こゑで聞ききました。

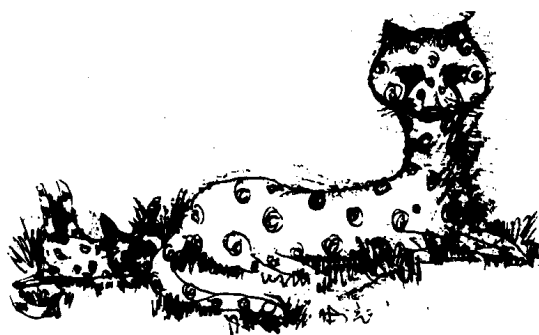
「ねえ、おにいちゃん。どうしてうちには、サンタクロースのおじいさん、来こないの？」

「かあさんが、いそがしくて、たのみに行いけなかつたんだって。きつと、来年らいねんは来きてくれるよ。——あつ、馬車ばしゃの音おとがする」

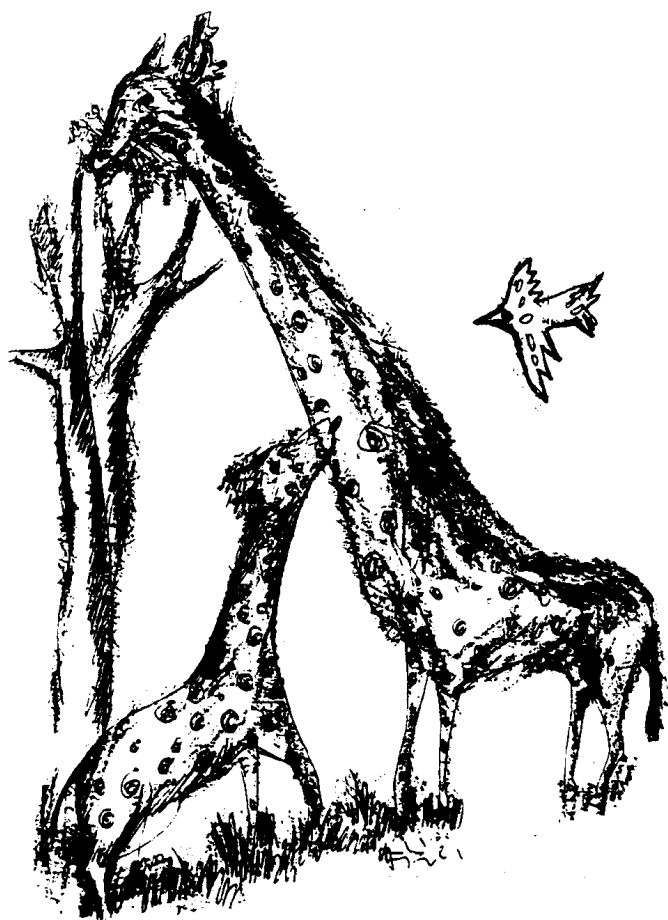


チルチルは、ベッドからとび起きると、まどの所へ行つて、外をのぞきました。
「ミチル、来てごらん。道の向こうの家の子どもたちが帰つて来たよ。ほら、家
の中まで見える。わあ、きれいだなあ」
「ほんとだ。ツリーに、おもちゃがたくさんかざつてある。あつ、おかしも、い
っぱい」

ミチルも、目をかがやかせました。



「おにいちゃん、どうしてあの子たち、おかし食^たべないの？」
「おなか、すいてないんだろ」
「おなか、すいてないの？ どうして？ あたしは、いつもすいているのに」
ふしぎそうなミチルを見て、チルチルは、いいことを思^{おも}いつきました。
「ミチル。ぼくたちも、おかしを食^たべるつもりになろうよ。ほーら、ぼくなんて、
こんなにたくさん食^たべるんだ」



「おかしごっこ？ うん。あたしも、食べる。むしゃむしゃ。ああ、おいしい」
二人は、おかしごっこをして、すっかりうれしくなりました。顔を見合わせて、くすくすつとわらった、そのときです。

とんとん！

だれかが、戸をたたたく音がしました。

二人が、びくつとすると、戸がギイッと開いて、
一人のこしの曲がつたおばあさんが入って来ました。

となりのペランゴーさんの家のおばあさんに、ち

よつとにていて、でも、ずつと、ふしぎな感じのするおばあさんです。

おばあさんは、コツコツと、ついでゆかをつつきながら、言いました。

「この家には、歌を歌う草か、青い鳥があるかね？」

へんてこなことを聞かれて、チルチルもミチルもびつくり。

「草はあるけど、歌なんて歌わないよ。鳥なら、ぼくのが、いるけど……」

チルチルがかべの鳥かごを指さすと、おばあさんは、ちらつと見て首をふりま
した。

「あんな鳥は、いらないよ。まだ、本当に青くなつてないからね。じゃあ、おま



えたち、青い鳥をさがしに行つておくれ」

「ぼくたちが？ どこへ？」

「さあね。おまえたちが、さがすのさ。どうしても、青い鳥がいるんだから」

「どうして？」

「なぜって、わたしのむすめが、病氣なんだよ。青い鳥があれば、幸福になれるんだとさ」

ふしぎなことばかり言うおばあさんに、チルチルはそつと聞いてみました。

「あのう……。おばあさんは、となりの家のおばあさんなの？ にているけど」
すると、おばあさんは、急にぶんぶんおこり出しました。

「じようだんじゃないよ。わたしは、妖精のベリーリウンヌだよ。さあ、つまらないことを言つてないで、早く、出かけておくれ」

「今？ このまま？ パジャマだよ」

「そうさ。ほら、この、魔法のぼうしをかしてあげるよ」

「魔法？ なんの魔法？」

おばあさんは、チルチルに、きらきら光る石がついているぼうしをくれしました。

「なんでも、本当のすがたが見えるぼうしさ。おまえたち人間は、なんにも本当のすがたを見ていないくせに、そのことに気がついていないんだからね。いいかい？ ほら、ぼうしをかぶって、ダイヤモンドを左へ回してごらん」

チルチルは、言われたとおり、ダイヤをちよつと、回してみました。

すると……！

「わあっ」

部屋の中が、急に、ぱあつと明るくなりました。

ベッドも戸だなもテーブルも、何もかも、まるで新しいものみたいに、ぴかぴか光っています。チルチルたちは、ちゃんと服を着ています。そして――。

「あつ、おばあさんが……」

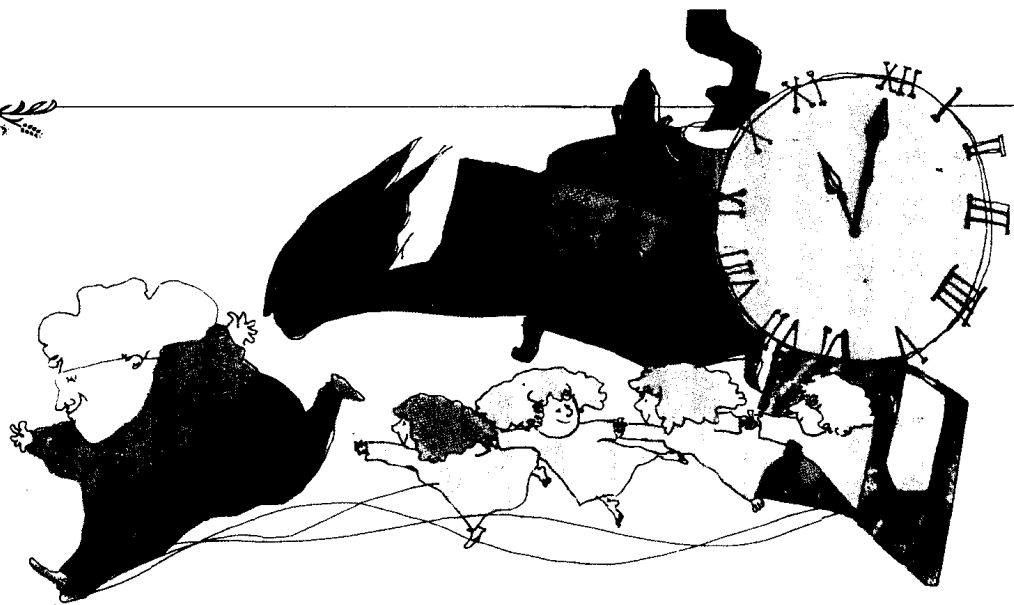
目の前には、こしの曲がったおばあさんの代わりに、美しい女の人がいました。

女の人は、目を丸くしているチルチルとミチルに、話しかけました。

「おどろいているね。これが、わたしの本当のすがたなんだよ。部屋の中だつて……。さあ、見てごらん」

まわりでは、次つぎと、ふしぎなことが起こっていました。





柱時計の戸が開いて、中から小さな女の子たちがたくさん出てくると、手をつないでダンスをして、また時計の中にもどって行きました。

「今のは？ あれは、だれなの？」

「時間の精だよ」

パンを作るおなべの中から、こんがりやけたパンの色の服を着た太った人が、とび出して来ました。

「あれは？」

「パンの精さ」

かまどの中から、赤い服を着た人が出て来ると、わらいながら、パンの精を追いかけ始めました。

「あれは？」

「火の精。ちよつと、らんぼうだね」

そのとき、ミチルがさげびました。

「あつ、おにいちゃん、見て！」

チルチルが見ると、さつきまで、犬のチローとねこのチレ



ツトがねむっていた所に、二人の人が立っているのです。

「あの人はだれ？」

チルチルが聞いたとたん、犬ににている男の人が走って来て、チルチルのほっぺたにキスをしました。

「ぼくですよ。チローです。チルチルさん」

「チローなの？ 本当に？ チローは、話ができるの？」

「もちろん！ ああ、うれしいな。やっと、チルチ

ルさんに、ぼくの言葉が分かるようになったんですね」

チローは、うれしくてたまらないように、チルチルのまわりで、とびはねました。

「じゃあ。あなたは……？」

ミチルが聞くと、ねこにいた女の人が、ゆつくりとミチルのそばへ来て、ていねいにおじぎをしました。すこし、気取っています。

「ええ、わたし、チレットです。ミチルさん」

ミチルは、もう、びっくりしてしまって、返事もできないみたいです。ふしぎなことは、まだまだ、つづきました。

